

『太平広記』 訳注

—— 卷四百十九「龍」二（下） ——

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』 訳注 —— 卷四百十九「龍」二（上） ——」（『国語国文学研究』第四十五号 二〇一〇年）に続き、『太平広記』の卷四百十九の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』 訳注 —— 卷四百十八「龍」一（上） ——」（『国語国文学研究』第四十三号 二〇〇八年）に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

なお本話は長編のため、内容によって全体を十一段落に分けた上で、前稿では前半六段落、本稿では後半五段落を扱うこととする。

〇15「柳殺」

（七）

〔本文〕

翌日、又宴殺於清光閣。錢塘因酒作色、踞謂殺曰、「不聞猛石可裂不可撓、義士可殺不可羞耶。愚有衷曲、欲一陳於公。如可、則俱在雲霄。如不可、則皆夷糞壤。足下以爲何如哉。」殺曰、「請問之。」

錢塘曰、「涇陽之妻、則洞庭君之愛女也。淑性茂質、爲九姻所重。不幸見辱於匪人、今則絕矣。將欲求託高義、世爲親戚。使受恩者知其所歸、懷愛者知其所付、豈不爲君子始終之道者。」殺肅然而作、欬然而笑曰、「誠不知錢塘君孱困如是。殺始聞跨九州、懷五岳、洩其憤怒、復見斷鎖金、掣玉柱、赴其急難。

毅以爲剛決明直、無如君者。蓋犯之者不避其死、感之者不愛其生。此眞丈夫之志。奈何簫管方洽、親賓正和、不顧其道、以威加人。豈僕之素望哉。若遇公於洪波之中、玄山之間、鼓以鱗鬚、被以雲雨、將迫毅以死、毅則以禽獸視之、亦何恨哉。今體被衣冠、坐談禮義、盡五常之志性、負百行之微旨。雖人世賢傑、有不如者。況江河靈類乎。而欲以蠢然之軀、悍然之性、乘酒假氣、將迫於人。豈近直哉。且毅之質、不足以藏王一甲之間。然而敢以不伏之心、勝王不道之氣。惟王鑒之。」

錢塘乃逡巡致謝曰、「寡人生長宮房、不聞正論。向者詞述狂妄、塘（塘字原闕。據明鈔本、陳校本補。）突高明。退出循顧、戾不容責。幸君子不爲此乖聞可也。」其夕復歡宴、其樂如舊。毅與錢塘遂爲知心友。

〔訓読〕

翌日、又た毅を清光閣に宴す。錢塘 酒に因りて色を作し、踞して毅に謂ひて曰く、「猛石は裂くべきも捲くべからず、義士は殺すべきも差むべからずと聞かずや。愚に衷曲有り、一たび公に陳べんと欲す。如し可ならば、則ち俱に雲霄に在り。如し可ならずば、則ち皆糞壤に夷せられん。足下 以て何如と爲すや」と。毅曰く、「之を聞かんことを請ふ」と。

錢塘曰く、「涇陽の妻は、則ち洞庭君の愛女なり。淑性茂質にして、九姻の重んずる所と爲る。不幸にして匪人に辱めらるるも、今則ち絶えたり。將に求めて高義に託し、世よ親戚と爲らんと欲す。恩を受くる者をして其の帰する所を知らしめ、愛

を懷く者をして其の付する所を知らしめば、豈に君子始終の道を爲す者ならずや」と。

毅 肅然として作ち、欸然として笑ひて曰く、「誠に錢塘君の辱困なることは是の如きを知らず。毅 始め九州に跨り、五岳を懷き、其の憤怒を洩せるを聞き、復た鎖金を断ち、玉柱を掣き、其の急難に赴くを見る。毅 以てへらく 剛決明直なること、君に如く者は無しと。蓋し之を犯す者には其の死を避けず、之に感ずる者には其の生を愛します。此 眞に丈夫の志なり。奈何ぞ簫管 方に洽らぎ、親賓 正に和するに、其の道を顧みず、威を以て人に加へん。豈に僕の素望ならんや。若し公に洪波の中、玄山の間に遇ひ、鼓するに鱗鬚を以てし、被るに雲雨を以てし、將に毅に迫るに死を以てせんとせば、毅 則ち禽獸を以て之を視るも、亦た何ぞ恨みんや。今 体 衣冠を被り、坐して礼義を談じ、五常の志性を尽し、百行の微旨を負ふ。人世の賢傑と雖も、如かざる者有り。況んや江河の靈類をや。而るに蠢然の軀、悍然の性を以て、酒に乗じて氣を偃り、將に人に迫らんと欲す。豈に直に近からんや。且つ毅の質は、以て王の一甲の間に藏るに足らず。然而れども敢へて不伏の心を以て、王の不道の氣に勝たん。惟だ王 之を鑒れ」と。

錢塘 乃ち逡巡して謝を致して曰く、「寡人 宮房に生長し、正論を聞かず。向者に狂妄を詞述し、高明に搪突す。退きて自ら循顧するに、戾 責を容れず。幸はくは 君子 此が爲に乖聞せざれば可なり」と。其の夕 復た歡宴し、其の樂 旧の如

し。穀と錢塘と遂に知心の友と爲る。

〔語注〕

○清光閣 他書未見。洞庭君の宮殿の名と思われるが、未詳。
○踞 膝を立てて座ること。○猛石可裂不可撓、義士可殺不可羞『毛詩』邶風「緑舟」にある「我心匪石、不可轉也。我心匪席、不可卷也。」（我が心 石に匪ず、転ずべからざるなり。我が心 席に匪ず、巻くべからざるなり。）を踏まえるか。○衷曲 心の奥深く潜む感情。○足下 同輩に対する尊称。○九姻「九族」に同じか。九族は高祖、曾祖、祖父、父、己、子、孫、ひ孫、玄孫。或いは父族四、母族三、妻族二。○匪人 行いの正しくない人。○孱困「孱」は弱い、劣る。「困」は貧しい、乱れる。○九州 太古に中国全土を分けて冀・兗・青・徐・揚・荊・予・梁・雍の九つの州としたもの。転じて、中国全土のこと。○五岳 五山に同じ。中国を代表する五つの名山（泰山（東岳）・華山（西岳）・衡山（南岳）・恒山（北岳）・嵩山（中岳）。○洽 和らぐ。和合する。○五常之志性 人の行うべき五つの道。父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝。『尚書』「泰誓」下に「今商王受、狎侮五常、荒怠弗敬。」（今商王受、五常を狎侮し、荒怠して敬せず。）とあり、正義に「五常即五典、謂父義、母慈、兄友、弟恭、子孝。五者人之常行、法天明道爲之。」（五常は即ち五典、父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝を謂ふ。五者は人の常行、天の明道に法りて之を爲る。）とある。また、仁・義・礼・智・信のこと。『白虎通德論』「情

性」に「五常者何、謂仁、義、禮、智、信也。」（五常は何ぞ、仁、義、礼、智、信を謂ふなり。）とある。○百行之微旨 士大夫の身に付けるべき多くの行い。『毛詩』衛風「氓」に「士之耽兮、猶可說也。」（士の耽るは、猶ほ説くべきなり。）とあり、その正義に「士有百行、可以功過相除。」（士に百行有り、功過を以て相除すべし。）とある。○直 曲がつたことを好まず、正直であること。真つ直ぐ筋の通つたこと。『論語』「衛靈公」篇に「子曰、直哉史魚。邦有道、如矢。邦無道、如矢。」（子曰く、直なるかな史魚。邦に道有らば、矢の如し。邦に道無きも、矢の如し。）とある。なおこれ以降、柳穀が行動の原理として「直」を重視していることが繰り返し述べられる。○寡人 諸侯が自分を謙遜して言う言葉。寡徳の人の意。○搪突 つきあたる、ぶしつけ。

〔訳文〕

翌日、また穀を清光閣でもてなした。錢塘君は酒に酔った様子で、立て膝をついて穀に向かつて言つた。「硬い石は割ることはできても巻くことはできず、義士は殺すことはできても辱めることはできない、と聞いたことはないだろうか。私は心中思う所があり、ちよつとそなたに伝えたく思う。もし叶うとなれば、ともに天にも昇ろう。もし叶わぬとなれば、ともに穢れた大地に滅ぼう。そなたはいかが思われるか。」穀は「どうかお聞かせ下さい。」と答えた。

錢塘君は「涇陽君の妻は、洞庭君の愛娘である。淑やかな性

格で気だても良く、一族でも重んじられておる。不幸にも人でなしめに辱められたが、今や縁も切れた。高義の士たるそなたにお預けし、代々親戚になりたいと思う。恩を受けた者にはその恩を返すべき相手を知らせ、愛情を抱いた者にはその愛を注ぐべき相手を知らせたならば、それこそが君子が一貫すべき道を行うということではあるまいか。」と言った。

殺は厳かに立ち上がると、突然笑い出して言った。「錢塘君ともあろう者がこんなにも下らぬ者だとは思ひもしなかった。

私は以前、あなたは中国全土を股にかけ、五岳を包み込み、その怒りを発したと耳にした。また金の鎖を断ち切り、玉の柱を引きずって、姫の窮地を救いに行くのを目にした。私は果断で実直なことでは、あなたに及ぶ者はあるまいと思っていた。そもそも危害を加えた相手に対しては死をも恐れず立ち向かい、心を動かされた相手の為ならば命を惜しまず行動する。これこそがまことに男子たる者の志。それなのにどうして音楽がゆったりと奏でられ、親戚賓客がなごやかに過ごしている中、道理を顧みずに人を脅すのか。そんなものが私が元来目指すものであるはずがあるうか。もしあなたに大波や深山の中で出会い、鱗と髯を振るわせ、雲や雨を身にまとい、死を迫られたならば、私があなただけだものと見なしたとて、恨みに思うに当たらない。今あなたは衣冠を身に付け、座って礼義を語り、五常の道を全て我がものとし、百行の奥深い意味を身に付けている。人界の賢者英傑といえども、あなたには及ばぬ者もいる。まして

や水中の靈妙なる存在たる竜なのだから、なおさらである。それなのにうごめく体に荒々しい気性で、酒の勢いに任せて人間を脅迫しようとするとは、どうしてこれが真つ直ぐ筋の通ったことに近いと言えようか。その上私の体など、王の鱗一枚の間に隠れるにも足りない。それでも勇氣を出して不屈の心によって、王の不道の氣に勝とう。王よ、よく考えよ。」

錢塘君は躊躇った上で謝罪した。「私は宮殿の中で育ち、正論を聞いたことがなかった。先ほどはでたらめな言葉を吐き、高潔明晰なるあなたにおしつけないことを申ししてしまった。退いて自ら振り返ってみるに、許されるような罪ではござらぬ。どうか君子よ、このせいで私より遠ざからないで頂きたい。」その夜また宴会を催したが、その楽しみは前回と同様であった。殺と錢塘君はそうして心の通じ合った友となった。

(八)

〔本文〕

明日、殺辭歸。洞庭君夫人別宴殺於潛景殿。男女僕妾等悉出預會。夫人泣謂殺曰、「骨肉受君子深恩、恨不得展愧戴、遂至睽別。」使前涇陽女當席拜殺以致謝。夫人又曰、「此別豈有復相遇之日乎。」殺其始雖不諾錢塘之請、然當此席、殊有歎恨之色。宴罷辭別、滿宮悽然。贈遺珍寶、怪不可述。殺於是復循途出江岸。見從者十餘人、擔囊以隨、至其家而辭去。

殺因適廣陵寶肆、鬻其所得。百未發一、財以盈兆。故淮右富

族咸以爲莫如。

遂娶於張氏、而又娶韓氏。數月、韓氏又亡。徙家金陵。常以鰥曠多感、或謀新匹。有媒氏告之曰、「有盧氏女、范陽人也。父名曰浩、嘗爲清流宰。晚歲好道、獨遊雲泉。今則不知所往矣。母曰鄭氏。前年適清河張氏、不幸而張夫早亡。母憐其少、惜其慧美、欲擇德以配焉。不識何如」。毅乃卜日就禮。既而男女二姓、俱爲豪族。法用禮物、盡其豐盛。金陵之士、莫不健仰。

〔訓読〕

明日、毅 辞し帰らんとす。洞庭君夫人 毅を潜景殿に別宴す。男女僕妾等 悉く出でて会に預かる。夫人 泣きて毅に謂ひて曰く、「骨肉 君子の深恩を受くるに、恨むらくは愧戴を展ぶるを得ずして、遂に睽別に至るを」と。前の涇陽の女をして席に当たりて毅に拝して以て謝を致さしむ。夫人 又た曰く、「此の別れ 豈に復た相遇ふの日有らんや」と。毅 其れ始め錢塘の請を諾せずと雖も、然れども此の席に当たり、殊に歎恨の色有り。

宴 罷みて辞別すれば、満宮 悽然たり。珍宝を贈遺し、怪なること述ぶべからず。毅 是に於いて復た途に循ひて江岸に出づ。従者十余人を見るに、囊を担ひて以て随ひ、其の家に至りて辞去す。

毅 因りて広陵の宝肆に適ぎ、其の得たる所を鬻ぐ。百に未だ一も發せざるに、財 以て兆に盈つ。故に淮右の富族 咸以爲へらく如くは莫しと。

遂に張氏を娶り、而して又た韓氏を娶る。數月にして、韓氏又た亡す。家を金陵に徙す。常に鰥曠多感なるを以て、或いは新匹を謀る。媒氏有りて之に告げて曰く、「盧氏の女有り、范陽の人なり。父の名を浩と曰ひ、嘗て清流の宰爲り。晚歲にして道を好み、独り雲泉に遊ぶ。今則ち在る所を知らず。母を鄭氏と曰ふ。前年 清河の張氏に適ぐも、不幸にして張夫 早に亡す。母 其の少きを憐れみ、其の慧美なるを惜しみ、徳を挹びて以て配せんと欲す。何如なるかを識らず」と。毅 乃ち日を卜して礼を就す。既にして男女二姓、俱に豪族爲り。法用の礼物、其の豊盛を尽くす。金陵の士、健仰せざる莫し。

〔語注〕

○潜景殿 他書未見。洞庭君の宮殿の名と思われるが、未詳。
○愧戴 感謝の意。○睽別「睽」は「睽」の偽字。「睽別」は別れ去ること。○怪 めずらしい。○廣陵 揚州の古名。現在の江蘇省揚州市一帯。唐代には揚州都督府が置かれて水陸交通の中心を占めたため、北方向け江南物資の大集散地となり、また揚子江河口に近いため、外国貿易港として空前の發展を遂げた。○淮右 淮水以西の地。安徽省合肥一帯。○金陵 現在の江蘇省南京市の古名。戦国時代の楚の金陵邑にあたる。三国呉が建業として都を置いて以来、江南の一大中心地として發展したが、隋の大運河開通によって江南の中心地が揚州に移った結果、往年の繁栄は見られなくなつていった。○鰥曠 妻の無い夫。やもお。○范陽 県名。現在の河北省涿州市あたり。なお

范陽の盧氏は名家として知られていた。『隋唐嘉話』巻中に「高宗朝、以太原王、范陽盧、滎陽鄭、清河博陵二崔、隴西趙郡二李等七姓、恃其族望、恥與他姓爲婚、乃禁其自姻娶。于是不敢復行婚禮、密裝飾其女以送夫家。」（高宗朝、太原の王、范陽の盧、滎陽の鄭、清河博陵の二崔、隴西趙郡の二李等七姓、其の族望を恃み、他姓と婚を爲すを恥づるを以て、乃ち其の自ら姻娶するを禁ず。是に于いて敢へて復た婚礼を行はず、密かに其の女を裝飾して以て夫の家に送る。）とある。○清流 県名。

現在の安徽省滁州市あたり。○雲泉 雲や泉のわくところ。山中を言う。○清河 県名。現在の河北省清河県の北西。○健仰とても羨むこと。

〔訳文〕

翌日、毅は別れを告げて帰ろうとした。洞庭君の夫人は毅を潜景殿に招いて別れの宴を催した。男も女も下男も下女も、皆で会に参加した。夫人は泣きながら毅に「我が娘があなた様の深い恩を受けましたのに、感謝の気持ちも申し上げぬ内、そのままお別れすることになりましたのは、何とも心残りでございます。」と言ひ、先ほどの涇陽の娘に命じて毅の席の所に行つて御礼を言わせた。夫人はまた「ここでお別れとなれば、どうして再びお目にかかる日がやつて参りましょうや。」と言つた。毅は最初は錢塘君の頼みを受け入れなかったものの、この場に至つて、とても後悔している様子であつた。

宴が終つて別れを告げると、宮殿中の者が悲しんだ。珍し

い宝物を贈つたが、どれも言葉にできない程素晴らしいものだった。毅はそれから帰路について岸边に到着した。十数人の従者が袋を背負つて後に従つており、毅の家に到着すると歸つて行つた。

毅はそこで広陵の宝物店に行つて、手にいれた宝物を売つた。百に一つも出さない内に、その財産は兆にもなつた。それで淮水以西の富豪は、皆とても敵わないと思つた。

そして張氏を娶つたが（亡くなり）、また韓氏を娶つたが、数ヶ月で韓氏も亡くなつてしまつた。金陵に引越したがい、いつも男やもめの寂しさから新しい連れ合いを探したりしていた。すると仲人が「范陽出身の盧氏の娘がおります。父の名を浩と言ひ、かつて清流県の県令でしたが、晩年には道を好むようになり、一人で山中に遊んでおりました。今は何処にいるか分かりません。母は鄭氏と言ひます。（娘は）先年、清河の張氏に嫁ぎましたが、不幸にも夫を早くに亡くしてしまいました。母親は彼女がまだ若いのを憐れみ、また彼女の賢く美しいのを惜しんで、立派な徳のある者を選んで嫁にやりたいと思つています。いかがでしょうか。」と言つてきたので、毅は吉日を占つて婚礼を行つた。新郎新婦とも豪族であり、式に用いる礼物は豪奢を極めた。金陵の人士で羨ましがらぬ者は無かつた。

(九)

〔本文〕

居月餘、毅因晚入戸、視其妻、深覺類於龍女。而逸艷豐厚、則又過之。因與話昔事。妻謂毅曰、「人世豈有如是之理乎。」

經歲餘（經歲餘原作然君與餘。據明鈔本改。）有一子、毅益重之。既產踰月、乃禮飾換服、召親戚相會（明鈔本、陳校本親戚相會作毅於簾室。）之間、笑謂毅曰、「君不憶余之於昔也。」毅曰、「夙爲洞庭君女傳書、至今（明鈔本、陳校本爲洞庭君女傳書至今八字原作非姻好何以五字。）爲憶。」妻曰、「余即洞庭君之女也。涇川之冤、君使得白。衡君之恩、誓心求報。洎錢塘季父論親不從、遂至睽違。天各一方、不能相問。父母欲配嫁濯錦小兒。某惟以心誓難移、親命難背、既爲君子棄絶、分無見期。而當初之冤、雖得以告諸父母、而誓報不得其志、復欲馳白於君子。值君子累娶、當娶於張、已而又娶於韓。迨張韓繼卒、君卜居於茲。故余之父母、乃喜余得遂報君之意。今日獲奉君子、咸善終世、死無恨矣。」因嗚咽泣涕交下。

對毅曰、「始不言者、知君無重色之心。今乃言者、知君有憾余（明鈔本、陳校本感余作愛子。）之意。婦人匪薄、不足以確厚永心。故因君愛子、以託相生（明鈔本、陳校本相生作賤質。）未知君意如何。愁懼兼心、不能自解。君附書之日、笑謂妾曰、「他日歸洞庭、慎無相避。」誠不知當此之際、君豈有意於今日之事乎。其後季父請於君、君固不許。君乃誠將不可邪、抑忿然邪。君其話之。」

〔訓読〕

居ること月余、毅 晩に因りて戸に入り、其の妻を視るに、深く竜女に類するを覚ゆ。而して逸艷豊厚なること、則ち又た之に過ぐ。因りて与に昔事を話す。妻 毅に謂ひて曰く、「人世 豈に是の如きの理有らんや」と。

歳余を経て一子有り、毅 益ます之を重んず。既に産みて月を踰え、乃ち襪 飾して服を換へ、親戚を召して相会するの間、笑ひて毅に謂ひて曰く、「君 余の昔に於けるを憶えざるや」と。毅曰く、「夙に洞庭君の女の為に書を伝へしは、今に至るも憶ひを為す」と。妻曰く、「余は即ち洞庭君の女なり。涇川の冤、君 白かすを得しむ。君の恩を衡み、心に誓ひて報いんことを求む。錢塘の季父の親を論じて従はれざるに洎び、遂に睽違に至る。天 各おの一方にして、相問ふ能はず。父母 濯錦の小兒に配嫁せんと欲す。某 惟だ心誓 移し難きも、親命 背き難く、既に君子の棄絶するところと爲り、分として見ふ期無し」といふ。而るに当初の冤、以て諸を父母に告ぐるを得たりと雖も、報いんことを誓ひて其の志を得ざれば、復た馳せて君子に白さんと欲す。君子の累ねて娶るに値ひ、張を娶るに当たり、已にして又た韓を娶る。張韓 繼ぎて卒するに迫り、君 茲に卜居す。故に余の父母、乃ち余の君に報いるの意を遂ぐるを得るを喜ぶ。今日 君子に奉ずるを獲、咸善く世を終へば、死するも恨み無し」と。因りて嗚咽して泣涕 交ごも下る。

毅に對ひて曰く、「始め言はざりしは、君に色を重んずるの

心無きを知ればなり。今乃ち言ふは、君に余に感ずるの意有るを知ればなり。婦人は匪薄なれば、以て永心を確厚するに足らず。故に君の子を愛するに因りて、以て相生を託す。未だ君が意の如何なるかを知らず。愁懼 心に兼ね、自ら解く能はず。君 書を附せしの日、笑ひて妾に謂ひて曰く、「他日 洞庭に帰らば、慎しみて相避くること無かれ」と。誠に知らず 此の際に当たりて、君 豈に今日の事に意有りしか。其の後 季父君に請ふも、君 固より許さず。君 乃ち誠に將た可とせざりしか、抑そも忿然たりしか。君 其れ之を話せ」と。

〔語注〕

○禮飾 美しく着飾ること。○季父 「季」は兄弟の内で最少の者の意で、父方の末の叔父。ここでは錢塘君のこと。○睽違 「睽」は「睽」の偽字。「睽違」は別れ去ること。○濯錦小兒 「濯錦」は濯錦江のことで、四川省成都市を流れる浣花溪の別名。「濯錦小兒」とは、そこに住む若い童王のことか。○ト居 住居を占い定めること。転じて、居所を定めること。○匪薄 「匪薄」に同じく、徳や才能が乏しいこと。○他日歸洞庭 慎無相避 柳毅は手紙を言付かつての別れ際、「吾爲使者、他日歸洞庭、幸勿相避。」(吾 使者と爲り、他日 洞庭に帰らば、幸はくは相避くること勿かれ。)と言ひ、童女は「寧止不避、當如親戚耳。」(寧ぞ止だに避けざるのみならんや、當に親戚の如くすべきのみ。)と答えている。

〔訳文〕

一月程経って、柳毅は日が暮れて部屋に入って妻の顔を見ると、かの童女によく似ているような気がした。そして並外れて艶やかで肉付きの良いことは、それ以上であつた。そこで共に以前のことを語り合つた。妻は柳毅に「世の中にどうしてそんな道理があるでしょうか。」と言つた。

一年余りして子供が一人生まれ、柳毅は妻を一層大事にした。生まれて一月経つと、妻は美しく着飾つて服を着替え、親戚を招いて集まつた時、笑ひながら柳毅に「あなたは私の昔のことを覚えておいでですか。」と言つた。毅が「以前洞庭君の娘の爲に手紙を届けたことは、今でも覚えてるよ。」と答えると、妻は「私は洞庭君の娘なのです。涇川での故無き罪を、あなたの御陰で晴らすことができました。あなたの御恩を心に刻み込み、きつと御恩返しを致したく思つておりましたが、錢塘の叔父上の親族とならうとのお話が断られましたので、そのままお別れとなつてしまいました。それぞれ天の果てと果てというありさまで、音信を通ずることもできませんでした。両親は私を濯錦君の息子に嫁がせようとしていました。私の心の誓ひは動かし難いものだったので、親の言いつけには背きがたく、あなたに見捨てられてしまつたからには、お会いすることはかなうまいと思つておりました。さりとて当時の故無き罪を両親にお伝えいただいたのに、御恩返しを誓つておきながらまだ果たさずにいるからには、きつとあなたのお側に参つて我が思いを

お伝えしたいと思っておりました。ところがあなたは次々と結婚なされ、初めは張氏、さらに韓氏を娶られました。しかし張氏と韓氏が相次いで亡くなられると、あなたはこちらに住まいを移されました。だから私の両親は、やっと私があなたへの御恩返し of 思いを果たすことができると喜びました。今あなたにお仕えすることができるようになり、一緒に立派に一生を送ることができたならば、死んでも心残りはありません。」と言ひ、むせび泣いて涙をこぼした。

そして柳毅の方を向いて、「最初に申し上げなかつたのは、あなたに容貌を重んずる心が無いということが分かつていたからです。今やっと申し上げたのは、あなたが私に情を抱いて下さっていることが分かつたからです。女性というのは取るに足らぬもの、あなたの変わらぬ心を確かにつなぎ止めておくことはできません。だからあなたの我が子への愛情にあやかつて、共に生きていくことをお願いしたいのです。あなたのお気持ちはいかがでしょうか。私は憂いや恐れで胸が一杯で、自分では晴らすことができません。あなたは手紙を言付かつて下さった日、笑いながら私に『後日あなたが洞庭湖にお戻りになられたら、どうか私を避けたりなさらないで下さい。』とおっしゃいました。その時あなたは今日のようなことを考えておられたのでしょうか。その後叔父上があなたに（私との結婚の）御願いを致しましたが、あなたは決してお許しにはなりませんでした。あなたは本当に（結婚が）お嫌だつたのでしょうか、それとも

（道を外れた御願ひに）お怒りになられたのでしょうか。どうかお話し下さい。」と言つた。

（十）

〔本文〕

毅曰、「似有命者。僕始見君于長涇之隅、枉抑憔悴、誠有不平之志。然自約其心者、達君之冤、餘無及也。以言『慎勿相避』者、偶然耳。豈思哉。泊錢塘逼迫之際、唯理有不可直、乃激人之怒耳。夫始以義行爲之志、寧有殺其壻而納其妻者邪。一不可也。善素以操眞爲志尚、寧有屈於己而伏於心者乎。二不可也。且以率肆胸臆、酬酢紛綸。唯直是圖、不遑避害。然而將別之日、見君有依然之容、心甚恨之。終以人事扼束、無由報謝。吁、今日君盧氏也。又家於人間。則吾始心未爲惑矣。從此以往、永奉懽好、心無纖慮也。」

妻因深感嬌泣、良久不已。有頃、謂毅曰、「勿以他類、遂爲無心。固當知報耳。夫龍壽萬歲。今與君同之。水陸無往不適。君不以爲妄也。」毅嘉之曰、「吾不知國客、乃復爲神仙之餌。」乃相與覲洞庭。既至而賓主盛禮、不可具紀。

後居南海、僅四十年。其邸第輿馬、珍鮮服玩、雖侯伯之室、無以加也。毅之族咸遂濡澤。以其春秋積序、容狀不衰、南海之人、靡不驚異。

泊開元中、上方屬意於神仙之事、精索道術。毅不得安、遂相與歸洞庭。凡十餘歲、莫知其跡。

〔訓読〕

毅曰く、「命有る者に似たり。僕 始め君を長涇の隅に見るに、枉抑憔悴して、誠に平らかならざるの志有り。然れども自ら其の心に約せしは、君の冤を達するのみにして、余は及ぶ無きなり。以て『慎しみて相避くること勿かれ』と言ふは、偶たま然るのみ。豈に思はんや。錢塘の逼迫の際に泊び、唯だ理に直かるべからざる有りて、乃ち人の怒りを激しうせしのみ。夫れ始め義行を以て之が志と為すに、寧ぞ其の婿を殺して其の妻を納る者有らんや。一の不可なり。善く素より操の真なるを以て志尚と為すに、寧ぞ己を屈して心を伏する者有らんや。二の不可なり。且つ胸臆を率肆するを以て、酬酢紛綸たり。唯だ直を是図り、害を避くるに違あらず。然而れども將に別れんとするの日、君に依然の容有るを見て、心に甚だ之を恨む。終に人事の扼束を以て、報謝するに由無し。吁、今日 君は盧氏なり。又た人間に家す。則ち吾が始心 未だ惑ひを為さず。此より以往、永く懽好を奉じ、心に纖慮無きなり」と。

妻 因りて深く感じて嬌泣し、良や久しくして已まず。頃く有りて、毅に謂ひて曰く、「他類なるを以て、遂に心無しと為す勿かれ。固より当に報いるを知るべきのみ。夫れ毫は寿 万歳なり。今君と之を同じくせん。水陸 往くとして適かざる無し。君 以て妄と為さざれ」と。毅 之を嘉して曰く、「吾知らず 国客となりて、乃ち復た神仙の餌を為すとは」と。乃ち相与に洞庭に觀す。既に至れば賓主 礼を盛んにし、具には

紀すべからず。

後 南海に居ること、僅かに四十年。其の邸第 輿馬、珍鮮の服玩は、侯伯の室と雖も、以て加ふる無きなり。毅の族 咸遂に濡沢なり。其の春秋 序を積むも、容状 衰へざるを以て、南海の人、驚異せざる靡し。

開元中に泊び、上方に意を神仙の事に属し、精しく道術を索む。毅 安んずるを得ず、遂に相与に洞庭に帰る。凡そ十余歳、其の跡を知る莫し。

〔語注〕

○君子 底本とする中華書局点校本は「君子」に作る。『太平広記』黄氏巾箱本、魯迅『唐宋传奇集』、黒田真美子『枕中記 李娃伝 鶯鶯伝他』（中国古典小説選 二〇〇六年）は底本と同じく「君子」、『太平広記』四庫全書本、汪辟疆『唐人小説』（中華書局香港分局 一九八五年）、王夢鷗『異聞集遺文校補』（『唐人小説研究』第二集 藝文印書館 一九七三年）、塩谷温『晋唐小説』（国訳漢文大成 国民文庫刊行会 一九二〇年）は「君於」、『太平広記故事集』（北京広播出版社 一九九九年）、内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』（新釈漢文大系 明治書院 一九七八年）は「君子」に作る。ここでは、柳毅が妻を「君子」と呼ぶのは不自然であることを勘案して、「子」は「子」の誤りと考へて改める。○枉抑 「枉」も「抑」も、まげる意。ここでは罪もなく酷い目に遭わされること。○志尚 高いことろざし。○率肆 率直に思いを述べること。○酬酢紛綸 「酬酢」

は応対すること。「紛綸」は乱れること。とにかく率直な考えを述べるだけで精一杯で、理路整然とした説き方ができなかったことを言う。○依然 ここでは「依」は恋い慕うの意。『毛詩』周頌「載芣」に「有嘖其鯁、思媚其婦、有依其土。」（嘖たる其の鯁有り、其の婦を思媚し、其の土を依づる有り。）とあり、鄭箋に「依之言愛也。」（依の言は愛なり。）とある。○恨心に強く残り、残念に思うこと。人に対してよりも自分に対しての言葉。○吾不知國客、乃復爲神仙之餌「餌」は「服餌」のことで、藥物や食物の摂取による養生法。この句は「國客」をどの意味で取るかで、大きく二説に分かれる。一つは竜女のこと、乃至その美貌と考えるもので、塩谷溫『晋唐小説』は「國客。國賓の意、龍女をいふ。」と注して「吾國客を知らず、乃ち復た神仙の餌をなさんと。」と訓じ、前野直彬『六朝・唐・宋小説選』（中国古典文学大系 平凡社 一九六八年）は「絶世の美人が、神仙の授ける不老不死の薬にもなるうとは、思いもよらなかつたよ」と訳し、今村与志雄『唐宋伝奇集（上）』（岩波文庫 一九八八年）は「わたしは知らなかつた。絶世の美貌が、仙人にするための餌だったとはね」と訳す。張友鶴『唐宋伝奇選』（人民文学出版社 一九九七年）は「國客」を「國客」に改め、「国色」と近い意味の非常に美しい容貌の意とする。もう一つは竜宮の客となった柳毅と考えるもので、内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』は「國客 竜宮での上客となったことをさす。」と注し、「僕は、竜宮の上客となり、それがまた

仙人の仲間入りをするなどということとは思ひもよらなかつたよ」と訳し、黒田真美子『枕中記 李娃伝 鶯鶯伝他』は「私は龍宮の賓客になったが、今度はまた神仙になろうとは思ひもよらなんだ。」と訳す。石海陽等編『唐宋伝奇』（華夏出版社 一九九五年）は、竜宮中に在って客となることを指すとしている。ここでは底本の「客」という字を尊重して、柳毅が竜宮で国賓待遇を受けたことと解しておく。○覲 諸侯や臣下が君主にお目にかかること。ここでは柳毅が洞庭君に面会することと言う。○南海 現在の広東省広州市あたり。○泊開元中、上方屬意於神仙之事、精索道術 玄宗が道教に傾倒したことは良く知られている。例えば『旧唐書』玄宗本紀の開元二十一年の記事に「制令士庶家藏『老子』一本。」（制して士庶の家をして『老子』一本を蔵せしむ。）とあるように、一家に一冊『老子』を備えさせたり、また開元二十九年の記事に「制兩京、諸州各置玄元皇帝廟竝崇玄學、置生徒、令習『老子』、『莊子』、『列子』、『文字』、毎年准明經例考試。」（兩京、諸州に制して各おの玄元皇帝廟 並びに崇玄學を置かしめ、生徒を置き、『老子』、『莊子』、『列子』、『文字』を習はしめ、毎年 明經の例に准じて考試す。）とあるように、州ごとに老子廟と、道教を学ぶ学校である崇玄學が置かれている。

〔訳文〕

毅は言った。「運命のようだ。私が初めてお前を涇水の辺で見かけた時、（お前は）故無き罪に憔悴しきっていて、本当に

落ち着いた気持ちではいられなくなった。しかし私が心に誓っていたのは、お前の故無き罪を知らせたいということだけで、他のことなど思いつきもしなかった。『どうか避けたりしないで下さい。』と言ったのは、たまたまそう言っただけなのだ。どうしてそんなことを考えたりしていただろうか。錢塘君に（お前との結婚を）迫られた時（に断った）は、彼の理屈が真つ直ぐ筋が通つていなかったもので、私を激しく怒らせただけなのだ。そもそも最初に仁義の行いを自らの志としておきながら、どうして夫を殺してその妻を奪う者があるだろうか。一つ目のよろしくない点である。元々固い節操を志しておきながら己を曲げて心を屈服させる者があるだろうか。二つ目のよろしくない点である。その上胸中の思いを率直に述べたので、応答も理路整然としたものではなかった。とにかく真つ直ぐ筋を通すことだけを考へて、害を避けることなど考へる余裕はなかった。しかし別れ際にお前の慕わしげな様子を見て、強い心残りを覚えた。だがとうとう人間界のしがらみによって、（仙界の住人であるお前に）御礼を言う手だてもなかった。ああ、今日お前は盧氏となり、人間界に身を置いている。そして私の以前よりの思いはいまだ揺るぎない。これからいつまでも仲睦まじくしようではないか。少しの心配もいらぬ。」

妻はそこで深く感じ入って涙を流し、長いこと止まらなかつた。しばらくして毅に向かつて、「私が人間でないからといって、心が無いなどと思わないで下さい。当然恩返しすることを

知っています。そもそも竜は一万歳の寿命を持っています。今あなたと共有することにいたしました。水中でも陸上でも、行けないところはありません。どうかでたらめとは思わないで下さいね。」と言った。毅は「私は（竜宮の）国賓となつた上、何と神仙の服餌を行えるようになるとは思ひもしなかつたよ。」と喜んだ。そして一緒に洞庭君に拝謁しに行つた。到着すると盛大な礼が行われたが、全てを描き尽くすことはできないほどであつた。

その後、四十年の間だけ南海に住んだ。その屋敷や興や馬、珍しい裝飾品などは、侯爵や伯爵の家であつてもそれ以上の物は無かつた。毅の一族はみな裕福になつた。毅は齢を重ねても容貌が衰えないので、南海の者はみな驚いた。

開元年間（七二三―七四二）、天子は神仙の事に関心を持つて、道術を徹底的に探し求めた。毅は心安らかではなく、そこで妻と一緒に洞庭湖に帰つた。十数年の間、彼の行方を知る者はいなかつた。

（十一）

〔本文〕

至開元末、毅之表弟薛嘏爲京畿令、謫官東南。經洞庭、晴晝長望、俄見碧山出於遠波。舟人皆側立曰、「此本無山。恐水怪耳。」指顧之際、山與舟相逼、乃有彩船自山馳來、迎問於嘏。其中有一人呼之曰、「柳公來候耳。」嘏省然記之。乃促至山下、

攝衣疾上。

山有宮闕如人世、見毅立於宮室之中。前列絲竹、後羅珠翠。物玩之盛、殊倍人間。毅詞理益玄、容顏益少。初迎蝦於砌、持蝦手曰、「別來瞬息、而髮毛已黃。」蝦笑曰、「兄爲神仙、弟爲枯骨、命也。」毅因出藥五十丸遺蝦曰、「此藥一丸、可增一歲耳。歲滿復來。無久居人世、以自苦也。」歎宴畢、蝦乃辭行。自是已後、遂絕影響。蝦常以是事告於人世。殆四紀、蝦亦不知所在。隴西李朝威敘而嘆曰、「五蟲之長、必以靈者、別斯見矣。人裸也、移信鱗蟲。洞庭含納大直、錢塘迅疾磊落、宜有承焉。蝦詠而不載、獨可隣其境。愚義之、爲斯文。」(出「異聞集」)

〔訓読〕

開元末に至り、毅の表弟 薛蝦 京畿令と爲るも、官を東南に謫せらる。洞庭を経、晴昼に長望するに、俄かに碧山の遠波に出づるを見る。舟人 皆側立して曰く、「此 本より山無し。恐らくは水怪なるのみ」と。指顧の際にして、山と舟と相逼るに、乃ち彩船有りて山より馳せ来たり、蝦を迎問す。其の中に一人有りて之を呼びて曰く、「柳公 来り候つのみ」と。蝦省然として之を記す。乃ち促やかに山下に至り、衣を擲りて疾く上る。

山に宮闕有りて人世の如く、毅の宮室の中に立つを見る。前に絲竹を列ね、後に珠翠を羅ぬ。物玩の盛んなること、殊に人間に倍す。毅は詞理 益ます玄にして、容顏 益ます少し。初め蝦を砌に迎へ、蝦の手を持ちて曰く、「別れて来瞬息なるに、

而るに髮毛 已に黄ばめり」と。蝦 笑ひて曰く、「兄は神仙と爲り、弟は枯骨と爲るは、命なり」と。毅 因りて藥五十丸を出だして蝦に遺りて曰く、「此の藥は一丸にして、一歳を増すべきのみ。歳 満たば復た来たれ。久しく人世に居りて、以て自ら苦しむること無かれ」と。歎宴 畢はり、蝦 乃ち辭し行く。是より已後、遂に影響を絶つ。蝦 常に是の事を以て人世に告ぐ。殆ど四紀にして、蝦も亦た在る所を知らず。

隴西の李朝威 叙して嘆じて曰く、「五蟲の長は、必ず靈なる者を以てし、別 斯に見はる。人は裸なるに、信を鱗蟲に移す。洞庭は大直を含納し、錢塘は迅疾磊落なれば、宜しく承くる有るべし。蝦 詠じて載せざるも、独り其の境に隣るべし。愚 之を義とし、斯の文を爲す」と。

〔語注〕

○表弟 父の姉妹の子、異姓のいとこの内、自分よりも年少の者。○薛蝦 未詳。○京畿令 京畿は唐代の行政区画である道の名。現在の陝西省中部の地で、首都長安を含む。令はその長官。○省然 はつと気づくこと。○影響 影と響き。形に影があり音に響きがあるように、物体そのものではなくそこから発せられる気配の意。ここでは柳毅の噂や足跡のことをいう。○四紀 一紀は十二年なので、四十八年となる。柳毅が薛蝦に仙藥五十粒を与え、年が満ちたら再び来るように言ったことと対応している。○隴西 県名。現在の甘肅省隴西県のあたり。なお隴西の李氏は名家として知られている。第八段「范陽」注に

引く『隋唐嘉話』を参照。○李朝威 この「柳毅伝」の作者であること以外、詳しいことは分からない。李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社 一九九三年）は、この話の記述から貞元中（七八五～八〇五）の人かと推測し、『新唐書』卷七十上「宗室世系表」に蜀王李湛（高祖李淵の弟）六世の孫として載せられている「朝威」がこの人ではないかと指摘する。唐王朝の李氏は隴西の李氏を出自としているので、符合することになる。○五蟲之長 「五蟲」は、五種類の動物。羽虫（鳥・毛虫（獸）・甲虫（貝や亀など）・鱗虫（魚など）・裸虫（人）。「五蟲之長」はその中でも優れたもので、『大戴礼記』『曾子天圓』に「毛蟲之精者曰鱗、羽蟲之精者曰鳳、介蟲之精者曰龜、鱗蟲之精者曰龍、倮蟲之精者曰聖人。」（毛蟲の精なる者を鱗と曰ひ、羽蟲の精なる者を鳳と曰ひ、介蟲の精なる者を龜と曰ひ、鱗蟲の精なる者を竜と曰ひ、倮蟲の精なる者を聖人と曰ふ。）とある。○宜有承焉 この句は「承」の対象を何と考えるかによって、諸説が分かれる。前野直彬『六朝・唐・宋小説選』と黒田真美子『枕中記 李娃伝 鶯鶯伝他』はともに洞庭君と錢塘君が柳毅の信義を受け入れたことと解するが、内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』は「素質を身に受けているところがあつたのであろう。」と、洞庭君と錢塘君の性格がその鱗虫の長としての性質を受けてのものだと解し、今村与志雄『唐宋伝奇集（上）』は「彼らの美德を継承する人間があるのは当然であつた。」と、後人が彼らを見習つて受け継ぐという意に解する。ここで

は、人間なのに竜に信義を伝えられた柳毅が素晴らしい一方で、受け取る側の竜王達にもそれを受け入れるのに相応しい度量があつたのだと解しておく。○蝦詠而不載 この句は「詠」と「載」をどう考えるかが問題となる。前野直彬『六朝・唐・宋小説選』は「詠」を慕う、「載」を成就する意と解し、「蝦がその道を慕いながらも成就し得なかつたのは」と訳している。内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』は「筆者は、「詠」は語つて讚美するの意に、「載」は、知識或は特殊な能力をささずかる意にみて、通釈のように訳しておいた。」と注し、「蝦は讚美しながらも知識（能力）は受けていなかったが」と訳されている。今村与志雄『唐宋伝奇集（上）』は「詠」を口頭で語ること、「載」を書物に書き記すことと解し、「薛蝦は、この事を口頭で伝えしたが、記載しなかつたから」と訳されている。黒田真美子『枕中記 李娃伝 鶯鶯伝他』は「詠」を詩歌を詠ずること、「載」を書物に書き記すことと解し（但し、書き記す主体は筆者李朝威であり、主体を薛蝦と考える今村訳とは異なる）、「蝦はそれに心動かされて詩歌を作つたが今は記さない。」と訳されている。ここでは、原文で「詠」の字が用いられていること、また唐代小説の中には例えば白居易「長恨歌」と陳鴻「長恨歌伝」、白居易「任氏怨歌行」と沈既濟「任氏伝」、元稹「李娃行」と白居易「李娃伝」のように、詩と小説がセットになつたものがあることを考え、「詠」は薛蝦がこの柳毅の物語を詠じた詩を作つたということ、そしてそれをここには載せていないことと解し

ておく。○『異聞集』 晩唐・陳翰撰。『異聞録』とも。既に散佚しているが、『太平広記』を中心に四十数条の佚文が残されており、そこには「古鏡記」「枕中記」「離魂記」「南柯太守伝」など、唐代小説の代表作と呼ぶべきものが多数含まれている。『太平広記』には二十五条が収められている。

〔訳文〕

開元年間（七二三～七四二）の末、毅の表弟の薛蝦は京畿令となったが、東南に左遷された。（赴任の旅で）洞庭湖を通過した折、晴れた昼間に遠くを眺めていた所、急に遠くの波間に青い山が出現するのが見えた。船員達はみな船端に立って、「ここには元々山など無い。きっと水の化け物だろう。」と言った。あつという間に山と舟が接近すると、何と色鮮やかな船が山から蝦を迎えに来了。その船の中の人は「柳公がおいでになつてお待ちだ。」と呼びかけてきた。蝦ははつと気づき、そこですぐに山の麓に行つて、衣をからげて急いで登つた。

山には宮殿があつて人間界のようで、毅が宮室の中に立っているのが見えた。前には管弦を連ね、後ろには真珠や翡翠を並べていた。調度品の素晴らしさは、人間界に倍するほどであった。毅の言葉遣いはますます奥深く、容貌はますます若返つていた。蝦を階段に出迎えるなりその手を取つて、「一別以来間もないというのに、髪はもう白くなっているな。」と言つた。蝦は笑つて、「兄上が神仙となり、私が朽ちた骨となるのは、運命というものです。」と言つた。毅はそこで仙薬を五十粒取

り出して蝦に贈り、「この薬は一粒で一年寿命を延ばすことができる。（この薬で延ばせる）年限が一杯になったらまた来なさい。いつまでも人間界に留まつて、自分を苦しめるのではないぞ。」と言つた。歓待の宴が終わると、蝦は別れを告げて去つた。その後、（柳毅の）音信は途絶えてしまつた。蝦はいつもこの事を世の人々に語つていたが、五十年近く経つた頃、蝦も何処に行つたのか分からなくなつた。

隴西の李朝威はこのことを記して感嘆した。「五虫の中でもその長たる存在は、必ず靈妙なる力を持つており、その違いがはつきりと現れる。人（である柳毅）は裸虫であるが、信義を鱗虫（である竜）に通じさせた。洞庭君は真つ直ぐ筋の通つたことを受け入れる性格で、錢塘君は果斷で豪放磊落であつたので、（柳毅の信義を）受け取るのに相応しかつたのである。薛蝦がこのことを詠じた詩はここには記載しないが、彼だけが柳毅達の境地に近づくことができたと言えるだろう。私はこの話を義であると感じ、この文を記したのである。」

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎屋敷 信晴

○福本 陸美

（○は編集担当者、◎は編集責任者）